

基礎科目における音楽の創造的な活動への取り組み

福 井 昭 史

Creative activities of music in basic subjects

Akifumi FUKUI

1 取り組みの背景と目的

大学などの高等教育では、2000年代に入ると教員による講義中心の画一的な授業形態への反省から、学生が主体的に活動に取り組む学習形態、俗にアクティブラーニングで総称される教授方法が推奨されるようになった。また、平成末期の教育課程改訂では、それまでの意欲や態度を重視する「ゆとり」教育による弊害や問題点を踏まえ、知識・技能を基礎に思考力、判断力、表現力の養成を強調する学力重視の方向へと学力観の転換がなされ、それと共に「主体的・対話的で深い学び」などの学習方法も示された。それまでの教育行政では、学習指導要領や免許法などで教育の内容は詳細に示されてきたが、教育の方法に強く言及したことはなく、このような流れには課題をも包含しているといえよう。

教育の内容と方法には密接な関係があり、知識・技能の習得には教授・学習型の学習が、思考力、表現力、創造性などの育成には自立・発見型の学習がそれぞれ適しているといわれ、それらのバランスが重要である。大学などで強調されたアクティブラーニングは後者にあたり、思考力、表現力などの育成には適しているが、新たな知識の獲得や基礎的な技能の習得には適しておらず、高等教育ではその性格上、教育方法の選択には十分な配慮が必要である。以上の点を踏まえ、担当する授業の指導計画(シラバス)作成にあたっている。

長崎女子短期大学では、全学科が履修する基礎科目の音楽に関連する科目として「生活と音楽」が開講されており2020年度からこの科目を担当し

ている。授業計画作成にあたっては、①人々の生活と音楽との関わりをさまざまな事例をもとに理解することと、②自ら音楽活動が行える意欲や表現力、技能を身に付けることとを目的に、次のように内容を構成した。①については、いくつかのテーマを設け、音楽の聴取や視聴を含む講義形式の授業とし、②については歌の創作とした。

人々の音楽との関りの主なものは聴取(鑑賞)であり、自ら歌ったり楽器を演奏したりすることは、カラオケを除けば少数のごく限られた人々ということになる。そのような現状をも踏まえ、歌の創作を授業内容に取り入れた理由は次の通りである。

歌唱、器楽などの表現活動はその多くが集団で行われ、ある程度の技能を必要とするのに対し、創作は一人でもできる活動であり、意欲があり、その方法を知っていれば手軽に取り組めると考えたからである。その背景には、スマートフォンを誰もが携帯するようになり、その機能を用いることで音楽の記録、旋律への伴奏付けなどが容易に出来るようになり、それらはさらに進化すると考えられる。誰もが自らの音楽表現や身体表現をYouTubeで発信するという現状を見れば、プロの作詞家、作曲家、歌手、演奏家による音楽を一般の人々が享受するという従来のシステムから、進化したコンピュータやスマートフォンの機能を活用することで、誰もが作詞、作曲、歌、演奏の発信の機会を持ち、専門家と一般の人々の境が希薄になるという新しい時代が訪れつつあるということである。読譜や記譜が出来なくても、音符に

ついでに最小限の知識を身に付ければ、表現手段の音楽作成ソフトを活用することができるからである。そのような背景から学生には、音楽創造の手順を理解させ、創作を体験させることで、自己表現の幅を広げ、音楽と親しみ生活を豊かなものを作ることができると思ったからである。

そこで、「生活と音楽」の授業計画に、各3コマによる2回の創作活動を取り入れた。1回目は、唱歌や童謡、歌曲に多くみられる75調による歌の創作、2回目は、ポピュラー音楽などにみられる自由な歌詞による創作とした。

2 創作活動の実践

本稿では、令和3年度に12名の学生を対象に3時間扱いで実施した「75調による歌の創作」の実践とその成果を紹介する。

(1) 授業の目標

授業の活動目標は、75調の歌詞による二部形式又は一部形式の歌の創作である。その活動を通

して獲得される知識や技能は以下の通りである。

- ・歌詞とリズムや旋律との関わりを理解する。
- ・二部形式などの楽曲の構成を理解する。
- ・歌詞の意味やイメージをもとに旋律を創作する。
- ・創作した旋律を楽譜に記述する。

(2) 学習活動の展開計画

授業展開は3時間扱いとし、その第1時では、はじめに75調の日本歌曲や唱歌の「花」（滝廉太郎作曲）「荒城の月」（滝廉太郎作曲）「赤とんぼ」（山田耕筰作曲）「春の小川」（文部省唱歌）を歌い、歌詞が7と5のシラブルからなることを理解する。歌唱に際しては、楽譜ではなく、歌詞を記述した資料を配布する。歌唱の後に、75調の歌詞の7と5をそれぞれ2小節にあてはめ、4小節で一つのまとまりになっていることを確認する。

その知識を基に、下の【資料1】を用いて創作の手順を説明し、それに従って活動する。なお、創作は個人でもグループでも良いことにした。

【資料1】

七五調の歌詞による創作

日本の歌は七五調や七七調などのものが多く、それを基にすると歌の旋律を容易に創作することができる。その手順とポイントは以下のとおりである。

〔創作の手順とポイント〕

- 1 4小節に7と5を入れる。
- 2 1, 2小節目に7（+ - a）、3, 4小節目に5（+ - a）を入れる。
- 3 言葉の始まりを小節のはじめにするのが望ましい。
- 4 8小節（75からなる4小節が2つ）で最も短い楽曲ができる。〔一部形式〕
- 5 8小節のうち、はじめの4小節目では終わらない。続くように創作する。
- 6 8小節の最も短い楽曲を2つ又は3つ合わせると、さらに規模の大きい楽曲ができる。
- 7 同じリズムやメロディーを使うことで、楽曲としてのまとまりをもたせる。
- 8 歌いやすいメロディーでクライマックス（頂点）があるとよい。

〔創作の例〕

○七五調の歌詞に基本に忠実に創作すると次のようになる。

は	ー	な	や	の	じ	ー	い	さ	ん	・	は	ー	な	う	り	に
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

お	ー	は	な	は	ま	ー	ち	で	・	み	ー	な	う	れ	た
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---



その後の創作の活動では、はじめに75調の歌詞を創作するのであるが、歌詞を作ることができない者のために、島崎藤村、金子みすずの詩を示し、それらを使えるようにする。

第2時と第3時は、創作活動と作品の発表で、出来た作品はコンピュータの楽譜作成ソフトに入力し旋律を確認するとともに、簡易伴奏を加え全員で聴取する。また、創作の後には、各々の作品の

【譜例 1】〔作品 1〕

♩=102

こ と し も く る よ あ の き せ つ

5
み ん な だ い す き ク リ ス マ ス

9
シャ ン パ ン か た て に ハ イ チ ー ス

13
み ん な で は し ゃ ぐ ふ ゆ の よ る

清書した楽譜を作成し配布する。

(3) 学習展開の記録

第1時は、計画に従って展開し、創作活動に入った。歌詞の創作に悩む者も数名おり、既存の詩を用いることにした。

第1時までには歌詞を決定し、本格的な旋律の創作は第2時からとなった。

はじめに資料1の〔創作の例〕にある歌詞を記入する枠を使いリズムを創作した。その後、教室内のピアノやキーボードを用いて旋律を創作した。この時間の内に創作できた者もあり、その中の1グループの作品、譜例1をコンピュータソフトに入力し全員で聴取するこ

とができた。そのことが、その他の学生の意欲を高めることになったと考えられる。

譜例1は学生が創作した旋律にピアノ伴奏を付け聴取させたものである。

授業では、2人、3人でのグループ活動があり、全体で9曲が創作された。その中の2曲は金子みすずの詩を使用している。

(4) 学生の作品

自作された歌詞の大部分は7 5 調であるが、次のような変則的な構成のものもあった。

〔作品 2〕

あきのひかり かがやいて
まちにひかり こぼれおち
このあかるさに しずかな
ひびきが きこえるよ

このように〔6 5・6 5・7
4・4 5〕であり、〔7 5〕は1行もない。この歌詞に付けら

れた旋律は譜例2のように、言葉の始めが小節のはじまりとなっており「言葉の始まりを小節のはじめにする」に適合しており、創作方法の基本は守られている。

その他の自作の歌詞は、次の通り7 5 調であった。

〔作品 3〕

【譜例 2】〔作品 2〕

あ き の ひ か り か が や い て

5
ま ち に ひ か り こ ぼ れ お ち

9
こ の あ か る さ に し ず か な

13
ひ び き が き こ え る よ

このはまいちる きのしたで
あきのきせつを かんじます
ひにひにさむく なるひびを
どうぶつはみな いきている

〔作品4〕

けいざいがくが なくなれば
わたしはすぐに よしのやへ
ひるめしかって いえかえる
ひるがどうにも まちどおし

〔作品5〕

ゆきのふるあさ ふとんから
なかなかでれず あさねぼう

以上の作品は完全な7 5 調であり、また、次の
歌詞も * 印の行を除けば7 5 調である。

〔作品1〕

ことしくるよ あのきせつ
みんなだいすき クリスマス

* シャンパンかたてに はいチーズ

* みんなではしゃぐ ふゆのよる〔注1〕

〔作品6〕

* もみじのはっぱが いろづいて〔注1〕

あきのおとずれ しらせるよ

しだいにいろが うすくなり

ふゆのおとずれ しらせるよ

〔注1〕の歌詞の「はしゃぐ」「はっぱ」は1 シラブルととれるので、それらの行は7 5 調といえる。

歌詞の内容には作品1、作品4、作品5 のような学生の現代的な気質を表したユーモアにあふれたものもみられた。

2 行の構成の作品5を除けば、残り全てが4 行の歌詞である。既成の詩を選んだ作品も4 行を用いており、それらは二部形式の構成となっている。その例外が作品1で2 拍子のリズムで創作されて

おり、小楽節が8 小節と考えられ、次のような一部形式の構成である。(【譜例1】参照)

【譜例3】〔作品5〕



前楽節（8 小節）半終止（V の和音）

後楽節（8 小節）完全終止

【譜例4】〔作品7〕



一部形式のもう一つの作品、作品5は次のような構成である。(【譜例3】参照)

前楽節（8 小節）不完全終止（IV の和音で終止）

後楽節（8 小節）完全終止

【譜例5】〔作品8〕金子みすず・詩



この作品5は、一部形式の短い作品ながら創作上の優れた点が多々みられる。高音部記号の五線の内側に入る歌いやすい音域（ハ～変ロ）になるようへ長調にしたこと、冒頭のソドレミの旋律が後楽節の始めでは、長2度上でラレ

【譜例 6】〔作品 3〕

【譜例 7】〔作品 9〕金子みすず・原詩に補足

ミファと模倣されていること、順次進行を基本としながらも跳躍進行を巧みに用いていることなどである。具体的には、2小節目のミドファミ、3～4小節目にかけてのミレドソラの部分であり、跳躍後は反進行し自然な動きの旋律となっている。

典型的な二部形式で創作されているのが作品7であり、[a, a', b, a']の構成である。（【譜

例 4】参照）

ト長調の作品で付点のリズムと順次進行の流れるような旋律に特徴がある。

これと同様に創作のポイントとして示した「同じリズムやメロディーを使うことで、楽曲としてのまとまりをもたせる」という視点を生かした作品は次のとおりである。

【譜例 5】作品 8

[a, b, a, b']

【譜例 6】作品 3

[a, b, a, c]

【譜例 8】作品 4

[a, b, b, c]

このように小楽節を単位とする反復がみられる作品が多かったが、リズムの反復や模倣はみられるものの、旋律の反復がみられないものもあった。作品9【譜例 7】と作品6【譜例 9】である。

創作のポイントとして示した「歌いやすいメロディーでクライマックス（頂点）がある」の視点からは、作品7の11小節目の二音が旋律の適切な箇所で頂点を形成している。（【譜例 4】）

作品2は、2～3小節目でミファソラシ[♯]ラソと向上する順次進行で頂点を形成しており、13～14小節目ではミ

ファソ[♭]ラとリズムを含めて楽曲全体を通しての頂点を形成している。（【譜例 2】）

学生に配布した前述の資料1には記述していないが、旋律創作にあたって口頭で補足した「順次進行を基本とすると歌いやすくなる」「だんだん高くなり、下がって落ち着くという、山型の旋律にするとよい」という視点は、どの作品にも生か

【譜例 8】〔作品 4〕

けいざいがくがなくなれば
わたしはすぐによしのやへ
ひるめしか一つていえかえる
ひるがどーにもまちどおし

【譜例 9】〔作品 6〕

もみじのはっぱがいろづいて
あきのおとずれしらせてる
しだいにいろがうすくなり
ふゆのおとずれしらせるよ

されていた。

授業のまとめとして学生が創作した旋律に伴奏を付け聴取させた。伴奏の例が譜例 1、譜例 7、譜例 9 であり、ピアノを基本にその他の楽器を加えたものとした。譜例 1 は 8 ビートでリズム感のあるポピュラー風に、譜例 7、譜例 9 は、歌唱や合唱の伴奏によくみられるものにするなど、歌詞や旋律に合わせたリズムパターンの伴奏とした。

また、伴奏の和声は I、IV、V の主要三和音だけでなく II、III、VI や借用和音を加え現代的なものとした。

3 実践のまとめと課題

難しい課題と思われがちな歌の創作であるが、活動の方法と手順を理解し意欲を持つことで、容易に活動でき学習成果も大きいといえる。

今回は 2 グループと 7 個人による全 9 曲が創作され、それらの出来栄には差がみられ、それは創作のポイントの理解度によると考えられ、指導上の課題といえる。

令和 2 年度から授業を担当し 2 回目の取組みとなった今回の実践での改善点は、創作の過程でコンピュータを活用し、旋律に伴奏を付けたものを聴取させたことである。このことによって、創作過程の旋律を確認できたばかりでなく、活動意欲を向上させたと考えられ、機器の活用など教育環境の整備の必要性を痛感した。